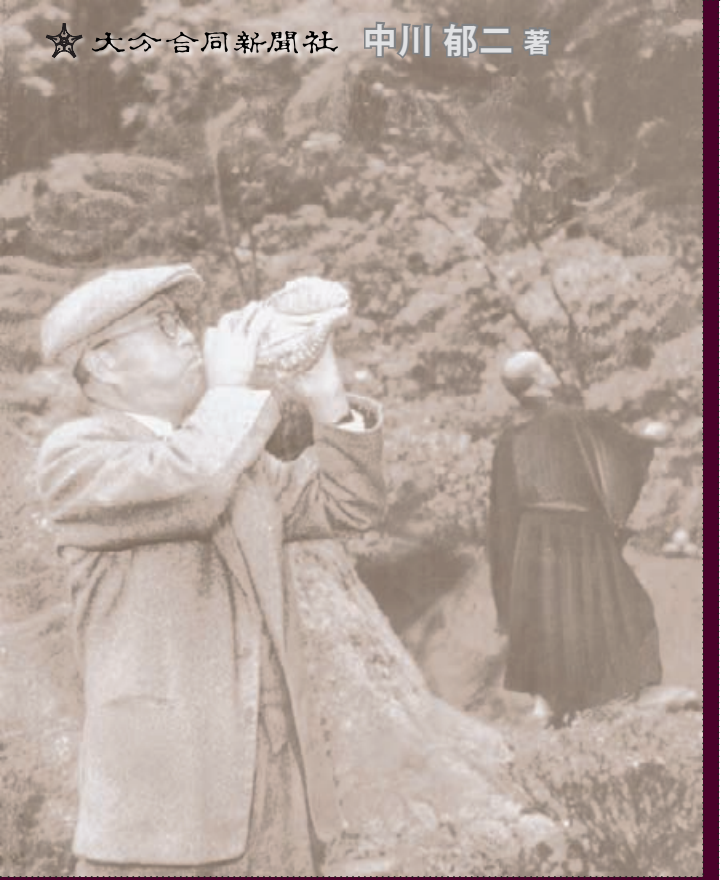
大分合同新聞社

中川 郁二 著



ロマンを追って

元大分市長 上田 保物語

オオイタ デジタルブック DIGITAL BOOK

デジタル版初版発行：2008 年 3 月 21 日

Next

第二章 苦学時代

第二章●苦学時代

- 平八郎、留年
- 平八郎、京都へ遊学
- 一万田と木下の交友
- 保、退学、上京
- 保、物集家の書生に
- 高見、大学教授を辞職
- 高見倒る

※奥付け／デジタルブックについて

●書籍案内

「ロマンを追って
—元大分市長上田保物語—」

著者：中川 郁二
A5 版 194 ページ
発行：大分合同新聞社
発行日：2003 年 2 月 15 日
定価：1600 円（税込み）

購入問合：その他の大分合同新聞社の本については、大分合同新聞文化センターへ
TEL：097-538-9662 「合同新聞の本」Web ページ

発刊に当たって

▽月刊誌「ミックス」（大分合同新聞社発行）で連載した「政治は創造なり・元大分市長上田保物語」（2001 年 5 月号～ 2002 年 4 月号）に若干手直しを加え、改題して 2003 年 2 月に書籍「ロマンを追って—元大分市長上田保物語—」を発刊。その書籍をデジタル化したのが、今回のデジタルブックです。　（本書に登場する人物の年齢や肩書き、施設名称等は、「ミックス」連載時点のもの）

第二章　苦学時代

平八郎、留年

上田保は二年先輩の福田平八郎という得難い親友ができて大分中学校の生活にやっと慣れてきた。だが成績の方は、相変わらず思わしくなかった。前章で紹介したように時折襲ってくる頭痛や耳鼻系の病に悩まされ、勉強に打ち込むことができなかったからだ。学校を休む日も目立つようになる。

三年生の平八郎も落第かどうかの瀬戸際まで追い込まれる。原因は苦手の数学。代数や幾何学の問題が出ると、白紙回答もたびたび。クラス主任の教師から職員室に呼び出され「福田、こんなこっちゃ、四年生にはなれんぞ」とこっぴどく叱られた。

遂に思いあまって、級友の一万田尚登に〝助け船〟を求める。彼は数学担当の教師が休んだ日には代理教師を務めるほどの秀才。

福田平八郎の生家跡（大分市王子中町）

一万田は明治二十六年（一八九三）八月十二日、諏訪村（現野津原町）今畑で生まれた。父は村会議員、教師の義興、母リン。三男で八人兄弟（うち、姉二人、弟二人、妹一人）。江戸時代に代々庄屋を務めた一万田家は、今畑の素封家である。

彼は教師になろうと大分

県師範学校を受験するつもりだったが、父から「地方に骨を埋めることを考えずに、中央で活躍しろ」とはっぱをかけられ、諏訪尋常小今畑分校から大分中学校へ進んだ。それから彼は寄宿生活を続けたが、寄宿舎の食事に閉口していた。当時、寄宿生の中から選ばれた炊事委員が一週間分の献立を作り、雇った炊事係が三食を料理していた。

一万田からいつも寄宿舎のまずい食事のことを聞かされていた平八郎は、夕方になると、卵や天ぷらを彼の部屋に差し入れては数学の特訓を受けていた。こうした特訓もむなしく、平八郎は三年生の定期試験の成績が合格ラインに達せず、留年の憂き目に遭う。

大分中学校は開校以来、各学年の昇級基準は厳しく、落第生や中退者が続出した。明治二十二年（一八八九）、一期生百一人のうち、卒業生はわずか三人。翌二十二年には二期生四十三人のうち、卒業生は十人という記録が残っている。

四十二年三月初旬の昼休み、運動場に隣接する栗々山という小高い丘の上に保と平八郎の二人が登り、座り込んだ。この栗々山一帯の土地は四十五年、交友会基金で購入され、生徒たちの憩いの場になる。後に弁護士になった保が東京在住の同期生に呼びかけて、この栗々山にちなんだ「くりくり会」を発足させる。

平八郎が切り出した。

「僕、学校を中退しようと思っている」

「えっ、なぜ？」

「今度の定期試験で算数の点数が悪くてね。留年しても、自

信がないんだよ」

「辞めて後はどうするの？」

「首藤先生の勧めで、京都の絵画専門学校を受験するつもりだ」

保はショックだった。福田先輩は数学で悩んでいると聞いていたが、留年したとはいえ、まさか中退するとは…。それにすぐ第二の道を選んでいる平八郎に畏敬の念さえ覚えた。彼は一瞬、平八郎の勉強部屋の壁に張ってあった色鮮やかな柿の水彩画や精密なタッチのデッサン画を思い出した。

平八郎、京都へ遊学

当時、平八郎の自宅に下宿していた首藤積（当時、大分師範学校付属小の訓導）は、大分中学校を中退した平八郎を京都市立絵画専門学校へ進学させるよう父馬太郎を根気よく説得した。「収入の保障もない絵描きなんてとんでもない」と頑として受け付けなかった馬太郎はようやく、京都での遊学を認めるようになる。もし、首藤の必死の説得がなかったら、平八郎の日本画家としての存在はあり得なかったかもしれない。

首藤 積

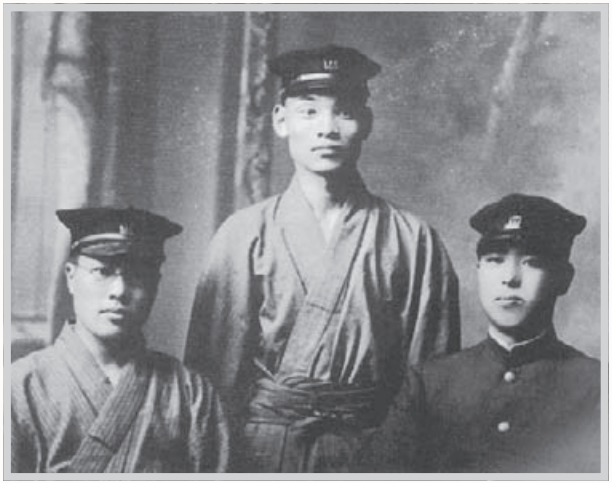
大分中学校を中退した平八郎は四十三年春、京都市立絵画専門学校に入学、翌四十四年に京都市立美術工芸学校に入り直し、本格的に日本画の勉強に打ち込んでいく。

一万田と木下の交友

級友の一万田は四十四年に優秀な成績で大分中学校を卒業し、熊本の第五高等学校へ進学する。学生寮で宇佐中学校から来た木下郁を知る。二人はともに東京帝国大学法科大学（後の東京帝国大学法学部）へ進む。ガリ勉の一万田に対して、当時から大人（たいじん）の風格を漂わせていた木下はボート部で活躍し、〝よく遊び、よく学ぶ〟秀才だった。

木下は明治二十七年（一八九四）三月十三日、安心院村（当時）木裳で生まれた。後に盟友となる保とは奇しくも生年、死亡年〔昭和五十五年（一八八六）〕とも同じである。父淳太郎、母ウメの二男。早世した兄の一郎のほか、姉みお、弟に哲（後に代議士）がいた。淳太郎は東京大学予備門（第一高等学校の前身）の在学中に胸を病み、創立したばかりの明治法律学校を経て帰郷。安心院村長、大分県議会議長などを歴任した。

祖父の雄吉は帆足万里の高弟であり、叔父に代議士の木下謙次郎、従兄弟には東京帝大の銀時計組で後に日本共産党の指



東京帝国大学時代の一万田尚人（中央）と木下郁（右端）

導者になった佐野学、吉田内閣の法務総裁（現在の法務大臣）になる殖田俊吉らがいる。一万田は自伝に「親類には他にも大学教授や政治家が多く、木下一家は大変な名門だった」と記している。

大学の講義と下宿での猛勉に明け暮れた一万田は、二年生の時に難関の高等文官試験に合格する。

保、退学、上京

一方、平八郎の大中退学で衝撃を受けた保は、成績がおもわしくないことから、自分自身の進路を考えなければならなくなった。当時の文学界は永井荷風の「あめりか物語」、田山花袋の「田舎教師」、谷崎潤一郎の「刺青」といった具合に新進気鋭の作家が続々と話題作を発表し、新風を吹き込んでいた。文学にのめり込んでいた彼が「よし、僕も作家になろう」と決意したのは、この時期だ。

保は三年から四年に進級するときの明治四十四年（一九一一）三月、出席日数の不足と成績不良で留年となった。

帰宅して顛末を報告した保に父庫蔵は烈火の如く怒り、「病身だからといって、落第するようなら、すぐやめて百姓をしろ」と叱りとばした。

父の短気な性格を濃厚に受け継いでいる保は反発。彼は母カネに「大分中学を退学して上京しようと思います。杵築出身の文学博士、物集（もずめ）高見先生を頼り、作家になるつもりです」と胸のうちを明かした。カネは驚くと同時に十七歳そこ

そこの息子がこうまで決心しているとはと心を動かされた。保の作家志望は、やはりあの読書のせいかしらと思ったりもする。

庫蔵が畑に出かけた後、カネは「向こうの落ち着き先が決まったら、すぐ手紙を寄こしなさい。お前は病身なんだから、体には十分気を付けるんだよ」と保にまとまった金と夫のお古の洋服を渡し、送り出した。

保、物集家の書生に

保は大分港から客船で神戸に行き、神戸から汽車で東京に到着。そのまま、人に場所を聞きながら本郷団子坂の物集邸にやっとたどり着く。紹介状もない保に面接した物集はその場で彼を書生として雇うことにした。ちょうど、書生を募集していたのと、保が同じ郷土の大分県出身であったからだ。

物集高見は弘化四年（一八四七）五月二十八日、杵築城下の北新町（現杵築市）で生まれた。父高世、母春子の長男。高世から国学を、杵築藩校「学習館」教授の元田竹渓から儒学を学び、長崎で蘭学を修めた。

杵築藩祖の松平英親をはじめ歴代の杵築藩主が教学の振興に力を注いできたため、杵築からは多くの学者を輩出する。三浦学派と称されるのは、三浦梅園を頂点に三浦黄鶴、三浦惟厚、三浦安之、矢野毅ら。綾部学派は綾部道弘、綾部安正、綾部富

物集　高見

坂、麻田剛立ら。元田一門では、元田竹渓、元田南豊、藤山惟熊、古原三平、小川含章、麻生公道、中野泰行、昭和動乱の外交官重光葵の父直愿、清原貞雄ら。そして、木下郁の従兄弟で社会運動家の佐野学もこの系列に入る。

物集高世、高見、高量（たかかず）の三代にわたる和歌・国学の一門もこうした学者の系譜で彩られる土壌の中で育まれていった。

高見はその後、明治五年（一八七二）に教部省に出仕、十九年（一八八六）に帝国大学文科大学（後の東京帝国大学文学部）教授となり、文部省参事官、学習院大学教授、國學院大学教授などを歴任。著書「日本大辞林」などの業績で三十二年に文学博士の第一号となった。

保が書生として物集邸に住み込んだ時は、物集の絶頂期だった。敷地千二百坪に新築された物集邸は部屋数が二十室もあり、周囲から〝団子坂御殿〟と呼ばれた。

当時、書生は保を含め四人、お手伝いは五人も採用、人力車で文部省や大学に出勤するという豪勢さだ。西ヶ原に別荘を新

苦学時代の保（中央）

築したのもこの頃である。物覚えがよく、頭の回転が速い保はすぐ物集のお気に入りとなり、秘書役もさせられる。物集は「上田君、作家で身を立てるのはおぼつかないよ。君の頭脳なら弁護士になれる。法律の勉強をしなさい」と助言する。

保はやっと書生生活に慣れ、偏頭痛や耳鼻系の病に悩まされることもなくなった。そして身長が伸び、がっしりした体格、まゆ太く、きりっとした容貌に。六畳の書生部屋で同室となった金沢出身の山本彦市と親しくなる。二つ年上で弁護士志望の彼は面倒見がよかった。保が物集の忠告に従って法律の勉強を始めようとしているのを知るや、いろいろな参考書を貸してくれる。その矢先、彼らは思いがけない事態に見舞われる。

高見、大学教授を辞職

主人の物集がライフワークの大作「広文庫」や「群書索引」の編纂に専念しようと、各大学教授の職を辞退し、宮中の御前講義などいっさいの公務を断ってしまった。

このため、定収入の道が閉ざされ、邸宅の新築資金として銀行から借りた五千円の返済ができなくなったのだ。多額の負債を抱えた物集がどうして、こんな挙に出たのか。経済的観念が欠けていたのか。現在でも謎のままだ。

どうも、物集家の家系は金に縁がないように思われる。杵築城下きっての豪商「金屋」に生まれた父の高世は、好きな学問に専心するために家業を弟の雄蔵に譲ったが、この金屋がつぶれてしまい、晩年は貧乏暮らし。長男高量も高見が残した膨大

な借金に追われ、生活保護を受ける羽目になる。

高量は東京帝国大文学部卒業後、新聞記者や編集者を経て、父の「広文庫」「群書索引」の編纂を手伝うようになる。

定収入をなくした高見はとたんに苦しくなった。当てにしていた原稿料だけでは、豪勢な生活を維持できるはずがない。保だけを残し、山本ら他の書生やお手伝いたちを解雇、多くの家財も手放した。

高見倒る

一方、「広文庫」「群書索引」の原稿は完成に近づいているのに、印刷費もないありさま。意を決した高見は出版資金を集めるための全国行脚に出るが、思うように集まらなかった。

大正四年（一九一五）十一月には、団子坂御殿も含め全財産が債権者たちによって競売され、高見は無一文になる。心身ともに疲れ切った彼は脳貧血で卒倒した。「物集博士倒る」の新聞記事が出るや、一人の援助者が現れた。中村精七郎という船成金である。

学問はないが義侠心の厚い中村の援助で「群書索引」（三巻）と「広文庫」（二十巻）が刊行され、やっと日の目をみる。

高見はその後も、悪戦苦闘しながら、「国体新論」「源氏物語」「和歌抄」などを次々と発表し、わが国の国語学に大きな足跡を残した。

高量は脳貧血で倒れた父の介抱や債権者の応対、残務整理に追われた。残った保も高量に協力したが、最後に路頭に放り出

されてしまった。大正五年（一九一六）初春、保が二十二歳のときのことだ。

高量は晩年の百三歳〔昭和五十七年（一九八二）〕の時に著した「百三歳。本日も晴天なり」のなかで、「昭和五十年（一九七五）、九十六歳のときに、元大分市長上田保氏から十万円贈られる」と記している。当時、大分生態水族館「マリーンパレス」の社長だった保は高量の窮状を知り、寄金をしたのであろう。高量は昭和六十年（一九八五）、百六歳でこの世を去る。

N

オオイタデジタルブック

オオイタデジタルブックは、大分合同新聞社と学校法人別府大学が、大分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたインターネット活用プロジェクト「NAN-NAN（なんなん）」の一環です。

NAN-NAN では、大分の文化と歴史を伝承していくうえで重要な、さまざまな文書や資料をデジタル化して公開します。そして、読者からの指摘・追加情報を受けながら逐次、改訂して充実発展を図っていきたいと願っています。情報があれば、ぜひ NAN-NAN 事務局にお寄せください。

NAN-NAN では、この「ロマンを追って」以外にもデジタルブック等をホームページで公開しています。インターネットに接続のうえ下のボタンをクリックすると、ホームページが立ち上がります。まずは、クリック！！！

大分合同新聞社　NAN-NAN　別府大学

著者略歴◇中川　郁二

一九三七年生まれ、別府市出身。福岡県立修猷館高、早稲田大学卒。民間企業勤務を経て、大分合同新聞社入社。報道部次長、別府支社編集部長、読者情報部長、論説委員、編集委員。

デジタル版「ロマンを追って―元大分市長上田保物語―」　第二章●苦学時代

2008 年 3 月 21 日初版発行

著者　中川　郁二

原著　2003 年 2 月 15 日発行／発行：大分合同新聞社／製作：大分合同新聞社文化センター／印刷：佐伯印刷

《デジタル版》

編集　大分合同新聞社

制作　別府大学メディア教育・研究センター 地域連携部

発行　NAN-NAN 事務局　（〒 870-8605 大分市府内町 3-9-15 大分合同新聞社　総合企画部内）

© 大分合同新聞社